

## 1 はじめに

「GIGAスクール構想」が提唱された後、3年間のコロナ禍で学校でのICT活用は大きく前進した。一人1台のタブレット端末の普及により、授業内での活用はもとより、学校と家庭を結ぶ学習機器としての存在も大きくなってきている。NIEにおいても、情報収集から情報活用に至るまで、今やICT技術はなくてはならないものとなりつつある。

今大会は、「ICTでひらくNIE新時代」をテーマに開催された。ICTというアイテムをいかに効果的に活用し、新たなNIEを創造していくかを軸に、講演・シンポジウム・公開授業・実践発表が行われた。

## 2 講演 「いのちを守る ことばを育てる」 俳人 夏井いつきさん

### 【講演の概要】

TVや新聞での快活な印象そのままに、講演が始まった。中学校教師であった夏井いつきさんが俳人としての道を選んだ志は一つ、「俳句の種を蒔く」ことだ。100年後もゆるがない、たくさんの人に愛される俳句の世界を構築するために、全国をとびまわり、句会ライブを続けられている。また、若い世代への種蒔きとして、愛媛新聞の俳句投稿「集まれ俳句キッズ」「青嵐俳壇」の選者を長年務められ、俳句を愛する子供達が育ってきている。さらに、全国から集まった高校生達が1つの句について熱いディスカッションを繰り広げる『俳句甲子園』は、今年で26回となった。

子供たちには、自分の命(心も体も)を守る人になってほしい。言葉は一瞬で心を殺す武器にもなるし、心を守るプロテクターにもなる。そして、言葉は心と心をつなぐ架け橋にもなる。学校教育では、「言葉を使いこなす」「言葉をあやつる」技術を子どもたちに身につけさせてほしいと願う。

『俳句は「言葉」の使い方を身につけるアイテム』である。使う言葉を考えることで、AIにはない人間の五感を使った生々しい身体感覚が育つ。季節やものの変化に気づく好奇心は自ら学ぶスイッチとなり、生涯教育の中で生き続ける。五七五の短い言葉を選びすぐり表現する中で、一つ一つの言葉をていねいに使うことのみならず、言葉の足りない部分を想像する力も育つ。ものごとを自分事としてとらえることができる想像力は、自分や他人の命を守ることにつながる。

「新聞」には無限の可能性がある。情報の速度はインターネットにはかなわないが、紙の新聞には「もの」としての存在や手触りだけでなく、ものごとをゆっくりと熟考する、考えをまとめていく時間がある。この強みを生かす発想で、100年後もなくしてはいけないものと考えてる。

夏井先生の講演を拝聴し、「言葉」の持つ可能性と危険性について、改めてじっくりと考えることができた。私たちは、学校で、そして、家庭で、子供たちに正しい言葉、美しい言葉、心地よい言葉を投げかけているだろうか。人と接する時、言葉を選び、ていねいに接しているだろうか。季節の移ろいを感じたり、周囲の人の気持ちを想像したりしながら日々生きているだろうか。夏井先生は『俳句は「言葉」を育てるアイテム』と言われた。私は、新聞も同様だと考える。私は、自分自身が今一度立ち止まり、「何のためにNIEを推進するのか」を問い直さなければいけないと強く感じた。そして、NIEを通して、どんな子供たちを育てていくのかを、ともにNIEを推進する仲間たちとともにしっかりと議論し、取り組みを継続していくことが必要だと感じた。

## 3 パネルディスカッション — テーマ「ICTでひらくNIE新時代」 —

コーディネーター 愛媛大学教育学部教授・愛媛県 NIE 研究会会長 鴛原 進さん

パネリスト ・今井互郎さん(松山市立小野小学校教諭・日本新聞協会NIEアドバイザー)

・小田浩範さん(松山市教育委員会松山市教育センター指導主事)

・新田航平さん(愛媛大学教育学部附属小学校6年)

・野添美来さん(愛媛CATVお客様本部営業部)

・大植美香さん(愛媛新聞社地域読者部局読者部長)

パネルディスカッションでは、ICT機器の導入により、教育現場の新聞活用がどのように変化しているのか、その強み弱みは何かを議論し、紙アナログとデジタルの使い分けや融合など、新しい NIE 像を探ることについて議論された。

## 1人1台端末とNIE

### ①ICT 機器導入による変化

#### 学校現場では

学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力の1つとして、「情報活用能力」が挙げられている。これは、NIE に大きく係わる能力である。ICT機器の導入にあたり、文部科学省は3つのステップ「すぐにもどの教科でも誰でも活かせる1人1台端末→教科の学びを深める・学びの本質に迫る⇒教科の学びをつなぐ、社会課題等の解決や1人一人の夢の実現に活かす」を挙げた。現在は中間点の「教科の学びを深める」段階にある。教科の学びを深めるためには、アウトプット(プレゼンテーション・動画の作成・新聞やレポートの作成)が重要であり、それらに共通するのは言語と画像を使うこと、そして、これらは相手に伝える行為であるから相手意識が求められる。相手に分かりやすく伝えるための再編集がしやすいところが、ICTのよさといえる。また、クラウドを活用した共同編集では、友達の意見や作成状況を共有し、話し合うことができる。

授業においては、調べ学習における情報収集や話し合いにおける活用、授業記録や板書を配布し共有する、振り返りシートやアンケートでの活用など、また、授業外では、宿題の提出、音読動画提出など、家庭学習における活用が日常的になってきている。ICT機器が導入されてからのNIEの変化として、情報収集における記事検索機能の活用、新聞制作アプリを使った新聞制作が行われている。新聞制作アプリを使用すれば、手書きに比べ、紙面構成や修正、画像の挿入などが簡単であるため、児童生徒には好評である。しかしながら、コピーペーストでは、理解が深まっていないと感ずることがある。NIEの3つの学習(活用・機能・制作)のそれぞれの場面で、紙とデジタルを必要に応じて使い分けている。

#### 児童の立場から

授業で、自分の端末で実験の動画を見て理解が深まったり、考察や話し合いの場面で、それぞれの結果や意見をクラスで共有したりすることができるのは便利だ。タブレット端末を使用した授業はゲーム感覚で楽しく学ぶことができるし、繰り返し動画を見て理解を深めることにも有効だ。

#### 社会人の立場から

新聞と言えば、「紙の新聞」が通常であるが、最近は身の回りで紙の新聞を広げて読んでいる姿はほとんどみられない。必要な情報は新聞社が発信した記事をスマートフォンで得る人が多い。しかし、それだけでは、仕事上情報が足りないと感じたため、紙の新聞も購読し、必要な情報を共有するようにしている。

#### 新聞社の立場から

NIEのデジタル化は、①紙の新聞をデータとして取り込んで共有すること(ICT端末を道具として使う)②新聞の情報をICT端末から入手することの2種類がある。愛媛新聞社では、小中学生向けICT教育専用サイト(通称eスタ)を開発し、新聞と子供達の接点を作った。県内の全20市町の小中学生が利用可で、主に、朝学習で活用されている。

ICTはNIEの間口・裾野を広げる、垣根を低くしていると感じる。現在は、新聞各社がデジタル教材の開発を行い、33社で作るデジタル教育推進協議会も発足した。新聞社が蓄積している情報を教材として再構築し、若い世代に新聞の価値をいかに知ってもらうか、タブレット端末導入をきっかけとして、新聞社もNIEについて再認識、再構築する動きが高まっている。

### ②「紙の新聞」と「デジタルの新聞」のバランス・使い分け

紙とデジタル両方の特徴を知らなければ、目的に応じて使い分けをすることはできない。この場合、情報のインプットとアウトプットの両面からその特徴を知る必要がある。パネルディスカッションの中で、その特徴について論じられたのでまとめとしてみる。

【情報収集の手段としての特徴】

	強み	弱み
紙の新聞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞という「モノ」としての存在がある。</li> <li>・発達段階により新聞を活用した多様な学習ができる。 (触れる・遊ぶ・作る・調べる・発展学習)</li> <li>・政治経済, 地域の問題など, 幅広い情報がある。</li> <li>・一覧性があり, 読み比べしやすい。</li> <li>・思わぬ情報に出会うことができる。</li> <li>・信頼性, 正確性が高い。</li> <li>・表現方法が豊かで正しい。</li> <li>・記事内容に倫理理念が正しく反映されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その場で情報を深めることは難しい。</li> <li>・デジタルよりも発信に時間がかかる。</li> <li>・動画や音声での発信はないため, 「自分で読む」ことが前提とされる。</li> </ul>
デジタル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・速報性が高い。</li> <li>・アクセスしやすく, 情報収集が容易にできる。</li> <li>・検索機能を使用して, 情報を選んだり, 知りたいことを深く掘り下げて調べたりすることができる。</li> <li>・興味関心に基づき主体的に学ぶことができる。</li> <li>・特性に応じた使い方ができる。 例) 音声読み上げ・画面拡大など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一覧性・総合性に弱い。</li> <li>・フィルターバブルにより, 情報が偏りやすい。</li> <li>・情報量が多く, 発達段階によっては整理分類が困難な場合もある。</li> <li>・情報の信頼性, 保障が明確でないものもある。</li> <li>・表現方法の正しさや倫理的に問題があるものもある。</li> <li>・長時間使うことにより, 心身の健康に課題。</li> </ul>

【情報整理・発信の手段としての特徴】

	強み	弱み
紙の新聞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単に書く(描く)ことができる。</li> <li>・記述や構成など新聞作成の自由度が高く, オリジナル性が高い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・得た情報を書き写したり, まとめたりすることが必要。</li> <li>・書き直し等の修正が困難。</li> <li>・共有しにくい。共同編集はしにくい。</li> </ul>
デジタル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞作成ソフト等の活用で, 書くことが苦手な児童生徒でも, 簡単に新聞作成ができる。</li> <li>・情報の再利用ができる。</li> <li>・何度でも見直しや編集が可能で完成度が高い。</li> <li>・共有しやすい。共同編集がしやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PC操作のスキルが必要である。</li> <li>・PCの機能やバージョンにより, できることが限定される。</li> </ul>

③NIE 新時代, これからの NIE とは(まとめ)

NIEにおいて, 紙もデジタルも必要な情報活用的手段である。両方のメリット, デメリットを知り, それらを学習の場面に合わせて, 児童生徒が自分で選んで活用する力をつけていくこと, 学校では, そのベースとなる力をつける必要がある。「誰ひとりとのこさない NIE」を目指して, 紙+デジタルでパワーアップした NIE に取り組むことが大事であるとまとめられた。最後に, パネリストの新田航平さんは, 新聞の強みは「読み返せること」であり, 読み返すことにより, 世の中の問題について時間をかけて理解できること, そして, 新聞には, 人の心を動かし, 次に繋がる隠れた学びの引き出しがたくさんあること, これからも, 新聞を活用する学習を通して, 未来に向けた幅広い発想力と創造力を磨いていきたいと, 力強く決意を述べた。

#### 4 公開授業

##### ○ 公開授業 分科会第 1 部 愛媛大学教育学部附属中学校 3 年

###### 『読み手の立場を越えて取り組む探究活動～読者・記者・取材対象者 三者の視点で考える』

授業は、総合的な学習の時間の「私たちが実現したい未来」をテーマとする探究活動の一環で、富永 剛志主幹教諭の指導の下で行われた。愛媛大学教育学部附属中学校は、「エージェンシーを発揮し、変革を起こす力を持った生徒の育成」を研究テーマとし、次の 3 つの力を育てたい力として掲げ、これらの力を育てる方法として NIE を取り入れている。

- ①事象から何が問題であるかを捉え、自ら課題を見いだす力
- ②一つ一つの課題を自分ごととして捉え、各教科での学びをもとに、よりよい学校生活を目指して、さらに実践の場で活用していく力
- ③教科等における学びを、自分たちの集団の中で生かし、さらに学校外における多様な他者との関わりの中で発揮する力

本単元は、「愛媛新聞 for study」の記事を活用した探究学習である。日常的に新聞に親しんでいる生徒であるが、読み手という立場でしか新聞に接していないため、記事の内容を自分ごととして捉えにくいという課題があった。そこで、記事の取材対象者と実際に記事を書いた記者をゲストティーチャーとして招聘し、地域貢献に対する思いを聞き、意見を交流することで、課題に対する考えを深めていくというねらいのもとで学習が行われた。授業のテーマは『「私たちが実現したい未来」のために、私たちはどのような思いを持ち、何を実践していけばよいだろう』。記事は、動物保護活動と地域おこし協力隊の 2 本。私は、後者のグループディスカッションを参観した。

取材対象者は地域おこし協力隊として、大阪から伊方町に移住された田中健介さん。地域おこし協力隊の任期は 3 年。現在、伊方町でキャンプ場やたこやき屋を経営する田中さんに対して、「地域おこし協力隊として大切にしていること」「行動する上で困難だったこと」「移住の思い」「モデルケースのイメージ」「残りの任期での取組み」などの質問が出された。生徒からは、これまで調査したことをもとにした疑問点や自分の考えが述べられ、それに対して GT からアドバイスをもらう場面もあった。また、記者に対しては、「記事を書いた時の思い」「情報の取り方で気をつけていること」「取材して記者として考えること」「記者の仕事で大切にしていること」「取材する時に必ず聞くこと」などの質問がなされた。記者として取材対象者の思いをどのように伝えるのかを中心に、相手意識と仕事への自信や誇りが生徒にも伝わるものであった。

ディスカッションの進行では、これまでの学習や生徒の考えがタブレットで共有され、それに基づいて意見を述べられていた。また、進行役の生徒が内容によって発言者を指名したり、時間を調整したりするなど効果的に活用されていた。

全体交流では、交流を通しての変化や学んだことが発表された。生徒自身の探究課題はすぐには実践し、解決できないものもあるが、取材対象者や記者との対話の中で、失敗やそれを乗り越えてきた体験談、これからも前進しようとする意気込み、そして、何よりも、1 つの記事を通して培われた両者の信頼関係など、学ぶべきことが多い交流であったことが発表から伺えた。

###### 【指導助言】

取材対象者や記者との対話の中で、記事には載せられていないエピソードや熱い思いが語られる。記事の裏側や背景に触れることで、記事を読む時の姿勢を育てることができる。毎日配信される事件や事故、その背景には、多くの悲しみや怒りがあると想像できる人になる。今日の授業は、対話を通して、より自分ごとにするための授業であり、自分と向き合うための道具として新聞を活用した授業であった。

##### ○ 公開授業 分科会第 2 部 愛媛大学教育学部附属小学校 3 年

###### 『「言葉の力」を育む NIE～一つ一つの言葉に思いを込めて～』

愛媛大学教育学部附属小学校は、研究テーマを『子どもが創る「探究的な学び」をデザインする』とし、子どもが、学びの主角として、探究心を持って課題に立ち向かう姿を目指している。

本単元は、国語科と総合的な学習の時間をタイアップした教科横断的な学習である。子どもたちは、愛媛・松山の良いところを考え、それを県外の人に伝える新聞を制作し、発信する。自分たちが調べたことを、自分たちの言葉で効果的に伝えるという、まさに、NIEによって「言葉の力」を育てる学習である。3年生が考えた愛媛・松山の魅力は、松山城、道後温泉、鯛飯、地域キャラクター、電車など、多様にわたる。魅力別に7チームに分け、調査活動を行う。並行して、国語科において、発見ノートの書き方、新聞の書き方、インタビューの仕方などを学習し、その学習をもとに、調べ学習や新聞制作を行っている。

本時は、制作した新聞の見出しを考える授業であった。ここで、感心したのは、新聞制作の手段(手書きかパソコンか)を子どもたちが選んでいるということである。それぞれの良さがあり、子どもらしさがあふれる新聞であった。短い言葉で、効果的な表現を要する見出し作成は3年生にはかなり難しい。記事の内容から一番伝えたいことをキーワードとして取り出さなくてはならない。効果的な表現は、実際の新聞の見出しを例に示すなど、学習の手引きとなるものがあるとよかったですと感じた。見出しができた子ども達は、県外の参観者に新聞を手渡し、愛媛の良さを教えていた。参観者からの質問にもていねいに答えていた。

#### 【指導助言】

見出しをつける時の目安となる字数を示しておくことよい。新聞の題字と見出しが重複しているものも見受けられた。効果的な表現については、見出しのモデルを示しておくことよい。「坊ちゃん列車の紹介」⇒「坊ちゃん列車 乗ってみて」等。読み手に呼びかけたり、問題提起したりする表現方法も見出しをつける学習で学ぶことができる。

松山大会では、小学校・中学校・高等学校の公開授業と実践発表、特別支援学校の実践発表の他に、特別分科会として、「クロノリハイク」ワークショップと「タブレットでNIE～新聞社のデジタル教材最前線～」ミニパネルディスカッションも行われた。2013年に黒田真紀さんが考案した愛媛発祥の「クロノリハイク」。新聞記事から季語や使いたい言葉を探し出し、周囲を黒く塗って句を浮かび上がらせるというもので、大変興味深い。また、8月3日に行われたパネルディスカッションでも議論になった各新聞社のデジタル教材は、情報収集から情報整理・発信に至るまで、今後ますます需要が高まると予想される。愛媛新聞 ONLINE では、大会動画が12月31日まで公開されているので、ぜひ、ご覧いただきたい。

#### 5 おわりに

8月4日、愛媛新聞は、「新聞×教育 探る未来図」という見出しで、NIE全国大会の開幕を1面トップで報じた。「紙かデジタルか」ではなく、「紙もデジタルも」適材適所で効果的に使うことができる子どもたちを育てるNIEでなければいけないと考える。本大会のいろいろな場面で論じられているように、両方を使いこなすには、両方の特徴や使い方を知ることが前提だ。大会終了後のNIEアドバイザー会議の中で、日本新聞協会NIEコーディネーター関口修司氏は、これまでの授業は、アナログかデジタルかであったが、これからの授業は、アナログとデジタルが融合して進んでいく単元学習であること、児童生徒が選択する力を身につけるには、初等中等教育の場で紙の良さをしっかり学ぶ必要があると述べられた。そして、アナログにもデジタルにもそれぞれ良さがある。どちらの方法を活用する場合も、「考える」ことに時間をかけることが大切であると助言された。

「ICTでひらくNIE新時代」をテーマに開催されたNIE全国大会。2日間の参加を通して、多くの学びを得ることができた。本大会で学んだことを糧に、明日からのNIE実践に役立てて行きたいと思う。大会の開催に係わられた全ての皆様に感謝申し上げます、大会の報告とする。